

神学的言語の研究

稲垣良典 著
Ryosuke INAGAKI

*A STUDY
OF THE THEOLOGICAL LANGUAGE
OF THOMAS AQUINAS*



創文社

神学的言語の研究

稲垣良典 著



創文社

稲垣 良典 (いながき・りょうすけ)

1928年佐賀県に生まれる。1951年東京大学文学部哲学科卒業。九州大学文学部教授を経て、現在、長崎純心大学人文学部教授。

〔著訳書〕『トマス・アキナス哲学の研究』『習慣の哲学』『恵みの時』『抽象と直観』、トマス・アキナス『神学大全』第11～16、18～20分冊（以上、創文社）、『トマス・アキナス倫理学の研究』（九州大学出版会）、『天使論序説』（講談社）、『トマス・アキナスの共通善思想』（有斐閣）、『トマス・アキナス』（勁草書房）、『信仰と理性』（第三文明社）

〔神学的言語の研究〕

二〇〇〇年二月二十五日
二〇〇〇年二月九日
第一刷印刷
第一刷発行

著者 稲垣良典
発行者 久保井浩俊
印刷者 安達精治

発行所 株式会社 創文社

〒0300233
東京都千代田区麹町二一六―七
電話 〇三―三六三―七一一〇
振替 〇〇二〇〇九二四七二

著者との申し合せにより検印省略

晓印刷・徳住製本

ISBN4-423-17119-8

Printed in Japan

まえがき

本書の表題は、収載された論文において考察されている事柄を正確に言い表わそうとすれば、トマス研究であることを明記して「トマス・アクイナス『神学大全』における神学的言語の問題」、あるいは「トマス・アクイナス神学の基本的性格についての言語哲学的考察」とすべきであつたであらう。実際にこれらの論文は私がこれまで行つてきたトマス研究の継続であり、以前の研究と異なっているのは主題がトマスの「哲学」ではなく、「神学」として指示されている点だけである。そのことは、トマス自身が神学者であり、彼の学問的仕事を何よりも神学者として遂行したという事実、そしてトマスの著作、とくに『神学大全』に長年親しむという労をとつた研究者なら、おそれ早かれ彼の学問的仕事を全体として、つまり神学として理解する方向へといわば自然に向う、という傾きに於てとくに變つたこととはいえないであらう。

まえがき
それにもかかわらず私があえて「神学的言語の研究」という一般的で形式的に響く表題をえらんだのは、これらの論文で行つた研究が一つの重要な学問的企図、すなわち（キリスト教）神学が厳密な意味での「学」であることを明確にするという企図に秩序づけられていることを強調したためであつた。もとよりこのような企図は一人の研究が一連の論文で実現しうるところを遙かに超えているが、私は神へと向けられた祈り、讃美、信仰告白、あるいは神秘的経験の表現などの宗教的言語から区別された、「神」と呼ばれる神秘に関わる認識的・学問的言語としての神学的言語を考察することによって、「学」としての神学への道が開かれうること示そうと試みたのであ

る。

いうまでもなく、「厳密な意味での『学』」——普遍性と確実性によって特徴づけられる論証知——とはいっても、人間の理性が独力ではけっして到達できない神秘に関わるものであるかぎり、神学が幾何学や数学、あるいは自然科学などと同列に並ぶ、それらとまったく同じ意味での学ではありえないことは明白である。このことはトマス自身、神学が「学」であるとの立場を提示するに先立って、神学を「人間の理性によって探求される哲学的学問」から区別された、人間の救いのために必要な「神的啓示にもとづく何らかの教え」として明確に規定していることからわかるように、はっきりと自覚していた。

したがって、神学は「学」であるという言明においては、「学」という名辭はその本来の厳密な中核的意味を保ちつつ、数学や自然科学の場合とは異なった意味で用いられていることを確認する必要がある。いいかえると、神学は「学」であるという言明が意味をもつものとして受けとられるためには、「学」という言葉がそこで用いられ、理解される「場」が、数学や自然科学など、われわれにとって最も身近で、よく知られた「学」(scientia)だけではなく、現在のわれわれにはほとんど全く知られていないが、われわれの認識能力(可能性)がそこに到って究極的に現実化され、完成されるべき、(神秘である)神の直視(visio Dei)という「知」(scientia)をもふくみうるところまで拡大される必要があることを指摘したい。神学という「学」は、われわれが通常「学」として理解しているものと、現在のわれわれには知られざるものとしてとどまっている、人間の究極目的としての「知」との中間に位置づけられるのである。

このような「学」理解と、それにもとづく神学が「学」であることを確立しようとする企図が、近代思想に特有な、そしてわれわれの間ではほとんど自明的なものとして受けいれられている「理性」観と正面から対立するもので

あることはあきらかであろう。この「理性」観によると、人間的理性に固有な、経験を通じて段階的に獲得される人間的認識の様式がそのまま無条件的に「理性」なのであり、したがってこのような人間的認識の射程にふくまれないものはすべて「理性」から排除される。このような根源的に「人間中心主義的」(anthropocentric)な「理性」観を受けいれるかぎり、神秘に関わる神学が厳密な意味で「学」ではありえないことはいうまでもない。しかし問題は、このような「理性」観が唯一の可能な立場であって、これに代りうる他の選択肢はありえないのか、ということである。そして私が本書の全体を通じてめざしているのは、そのようなもう一つの選択肢の可能性を提示することにはかからない。

それは、人間的理性(人間本性と言いかえてもよいが)は、自らに固有な自然本性的可能性を超えて、神的な認識(神的本性)に参与する受容能力を有するのであり、そのような「無限への能力」ないし「神を受容する能力・可能性」という自己超越的性格こそ人間的理性(人間本性)の本質的特徴にはかならないとする「理性」観である。このような「理性」観は、単なる中世思想への復帰でもなければ、早々と理性的探求を放棄して安易に神秘思想にくみすることでもない。むしろわれわれは、自己認識を徹底させるといふ困難な試みを通じて自らの理性的探求ないし認識活動の根源である理性能力(あるいはむしろ理性的靈魂)そのものにまでたどりつくことによって、右に述べたような無限(神秘としての神)へと向って開かれた理性の自己超越性を洞察することができるのであり、ここで提示している「理性」観はそのような洞察にもとづくものである。

このように、神学が「学」であることを確立しようとする試みは、われわれの間でいまなお支配的である「理性」観の根元的転回を前提とするものであり、私が本書で行った研究はその端初にすぎない。私はただトマスの『神学大全』において「学」としての神学がどのようにに構想され、構築されているかを言語哲学的にふりかえるこ

とによって、「学」としての神学の復権へと通じる一つの道をきりひらこうと試みたのである。

しかし、そのような研究の一つのささやかな成果として、トマスの神学がこれまで「スコラ神学」「思弁的神学」などの名称の下に想像され、解説されてきたものとはまったく異質なものであることをあきらかにすることができたと思う。トマスの神学的総合をゴシックの大聖堂にたとえることにはそれなりの根拠があるが、彼の神学的探求の全体はそのような壮大な知的建築の事業を超えて、福音書のキリストとの真のパーソナルな出会いをめざすものであったことを見落したならば、彼の神学の基本的性格を誤解することになる、といわざるをえない。近世ルネサンス、宗教改革以来の誤解と偏見の長い歴史のゆえに信じ難いと思われるかもしれないが、トマスの神学は徹底して「聖書的」であり、その神学的探求の全体が聖書を真に「神の言葉」として読むための準備教育であった、といっても過言ではない。

神学的言語の研究に着手するきっかけは、平成五年以来、清泉女子大学大学院でキリスト教言語思想の講義を担当するように依頼されたことであった。トマス『神学大全』（したがってまた彼の神学の基本的性格）を神学的言語の形成・変容という観点から読み、解釈する、という講義の構想は比較的早く形をとったが、それを細部にわたって仕上げてゆく仕事は容易に進まず、平成十年定年規定に従って講義が打きられたとき、研究はまだ一連の草案の段階にとどまっていた。本書の本論を構成する七つの論文はこの間の講義の草稿に多少の加筆をしたものにすぎない。したがって内容的にも極めて不備であり、とくに「学」としての神学の主題である神に関する神学言語的研究がまとめられていないのは重大な欠落であることを認めざるをえない。

実は、トマスもふくめて伝統的神学における神論は「一神教」(monotheism)という誤解され易い名称の下に甚

だしく曲解され、非難にさらされることが多い。すなわち「一なる神」は世界から超越し、離在する「独りなる神」であり、福音書が語る愛である神とはまったく異質な存在であるかのような誤解がひろまっている。しかし、トマスは『神学大全』において「一なる神」はけっして「独りなる神」ではなく、「三一なる神」すなわち溢れる生命と愛をわちあう交わりの神であること、そして神による創造の業はこのような豊かな交わりの発現として理解すべきであることをあきらかにしている。さらに、この交わりとわちあいの神、すなわち愛である神の完全な啓示が「人となられた神」の神秘にはかならない。このように、トマスの神論においては、哲学的探求が最終的に行きつく「一なる神」は福音書が語る愛である神と同じ神であり、「哲学者の神」と「イエス・キリストの神」はけっして分離されない。実は『神学大全』の全体がそのことをあきらかにしようとする試みなのである。

この他にも、「神の言葉」としての聖書の言語に関して十分な考察をしていないことも本書の欠陥として指摘すべきであろう。また何よりも「神学的言語の研究」という表題を掲げる以上、近代や現代にまで考察を拡大することとは困難であるにしても、せめてアウグスティヌスやアンセルムス、ボナヴェントゥラやドゥンズ・スコトゥス、さらにできればニュッサのグレゴリオスやヨハネス・ダマスケヌスなどの神学的探求を神学的言語の観点から考察すべきだったのであろう。そのような本書の不備な点を承知した上で、トマスの神学、ないし「学」としての神学の問題に関して何らかの問題提起を行うことができるのではないかとの期待をもって、このささやかな研究を公けにすることにした。

本書がこのような形で出版されるに到ったのは実に沢山の人々の御蔭であり、ここでその方々のすべてに適切な仕方で御礼を申し上げることはできない。何よりもこの研究に着手し、それを推進する機会を与えて下さった今道

友信教授（当時の大学院研究科長）をはじめとする清泉女子大学の関係者の皆さんに感謝したい。受講生たちの探究心と関心が大きな刺激になったことも記しておかなくてはならない。原稿を浄書し、種々有益な批評をしてくださった西南女学院大学片山寛教授にもこの機会に感謝の言葉を述べたい。校正と索引作りの仕事を引受けて下さったのは、熱心に講義に参加して私の研究を助けてくれた東京大学大学院学生の本芳久氏である。記してあつく感謝したい。出版に関してはいつもながら久保井浩俊社長をはじめとする創文社の皆さんの御好意と協力をうることができた。とくに編集部の小山光夫氏からは終始暖い励ましと適切な助言をいただいた。心から感謝の言葉を述べたい。最後になったが、本書は平成十一年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の交付を受けて出版されるものである。記して感謝の意を表する。

目 次

まえがき..... V

序 論

第一章 「学」としての神学..... 五

I 「学」としての神学の可能性..... 五

II 「学」としての神学をめぐる問い..... 八

III 「学」としての神学と現代の哲学的状況..... 二二

IV トマスにおける「学」としての神学..... 二六

V 「学」としての神学をめぐる問題..... 二〇

第二章 トマス・アキナスと神学的言語..... 二九

I 神学と聖書..... 二九

II 神学的言語について..... 三三

III 『神学大全』における神学的言語の展開と変容..... 三七

IV 結 語..... 四四

本 論

第三章	神学的言語としてのアナログア	五
I	トマス神学とアナログア	五
II	トマスの「アナログア」理解	五
III	神認識とアナログア	六
IV	アナログアと神学的言語	六
第四章	神学的言語としての「神の像」 ^{イマゴ・デイ} (1)——「神の像」再考	三
I	はじめに——問題	三
II	「人間の尊厳」をめぐる問題	六
III	「神の像」としての人間の正しい理解をめざして	九
IV	人間本性と「人間の尊厳」——真のヒューマニズムへの道	九
第五章	神学的言語としての「神の像」 ^{イマゴ・デイ} (2)——トマス・アキナスにおける神学的言語としての「神の像」	一五
I	はじめに——問題	一五
II	「神の像」の概念	一〇
III	「神の像」としての人間	一八
IV	結 び	二七

第六章	トマスにおける神学的言語としての「悪」(1)	一三七
I	問題——二つの「悪」言語	一三七
II	欠如 (privatio) と二つの悪	一四三
III	倫理的悪とは何か	一五〇
第七章	トマスにおける神学的言語としての「悪」(2)	一六九
I	問題	一六九
II	キリストにおける悪	一七四
III	キリストの罪	一七九
IV	結論——キリスト論的「悪」理解	一八四
第八章	キリスト論と神学的言語	一九九
I	問題——「学」としての神学	一九九
II	アンセルムスにおける「学」としての神学	二〇一
III	神学的言語としての「適わしさ」	二〇三
IV	「受肉」の神秘——聖書と神学的探求	二〇七
V	神学的言語としての「受肉」	二一〇
VI	結論——「神学的言語」の諸問題	二一六
第九章	受肉と神化	二三五

I	序論——問題	三二五
II	見神と神化(1)	三二七
III	見神と神化(2)	三三一
IV	キリストにおける至福なる知	三三三
V	『神学大全』における神学的言語としての受肉と神化——結論	三三七

付 論

一	トマス・アキナス『神学大全』の基本的構想	三四七
二	神学的言語について	三四四
1	はじめに	三四四
2	神学的言語と宗教的言語	三四五
3	教義と神学	三四六
4	神学と聖書	三四九
5	「学」としての神学	三六〇
6	神学と神秘的経験	三六三
7	『神学大全』第一部における神学的言語	三六四
8	『神学大全』第二、三部における神学的言語	三六七

目次

索

引

.....

1
{
26

神学的言語の研究

序

論